

## 症例報告

### 高齢者の乳腺分泌癌の一例

沖津 奈都, 開野 友佳理, 田中

倚山会田岡病院乳腺甲状腺科

(令和3年4月12日受付) (令和3年4月27日受理)

隆, 三木 仁司, 森本 忠興

症例は67歳閉経後女性。胸椎椎体骨折にて他院入院時に右乳腺の腫瘍を訴え当院紹介となった。右乳頭直下に硬い腫瘍を触知し、マンモグラフィーで境界明瞭な腫瘍を認め、超音波検査でも15×14×16mmの比較的境界明瞭な低エコー領域を認めた。針生検にて浸潤性乳管癌の診断であり、右乳房切除術とセンチネルリンパ節生検を施行した。病理検査では腫瘍細胞が微小嚢胞状あるいは管状構造をとり増殖しており、内部に好酸性分泌物が見られた。ER, PgR, HER2はともに陰性で、S100は陽性、EMAは部分的に陽性、Adipophilinは弱陽性で、乳腺分泌癌と診断された。乳腺分泌癌はtriple negativeタイプが多いが、比較的予後良好で、局所再発や遠隔転移をきたす報告は少ないとされている。しかし発生頻度も低いことから、いまだ標準療法として定まった補助療法は確立されていない。若干の文献的考察を加えて報告する。

#### 症 例

症例；68歳。閉経後女性。

主訴；右乳頭直下の腫瘍。

既往歴；脳幹部脳梗塞 高血圧 糖尿病

現病歴；自宅で転倒し胸椎椎体骨折にて近医に入院の際に1年前から自覚していた右乳房の腫瘍を訴え当科紹介となった。

受診時視触診；右乳頭直下に弾性硬の2cm弱の腫瘍を触知した。皮膚所見はなく、乳頭分泌も認めなかった。

マンモグラフィー検査（図1）；MLO, CCともに右乳房乳頭直下に境界明瞭な高濃度腫瘍を認めた。

超音波検査（図2）；辺縁明瞭で内部は低エコーでや

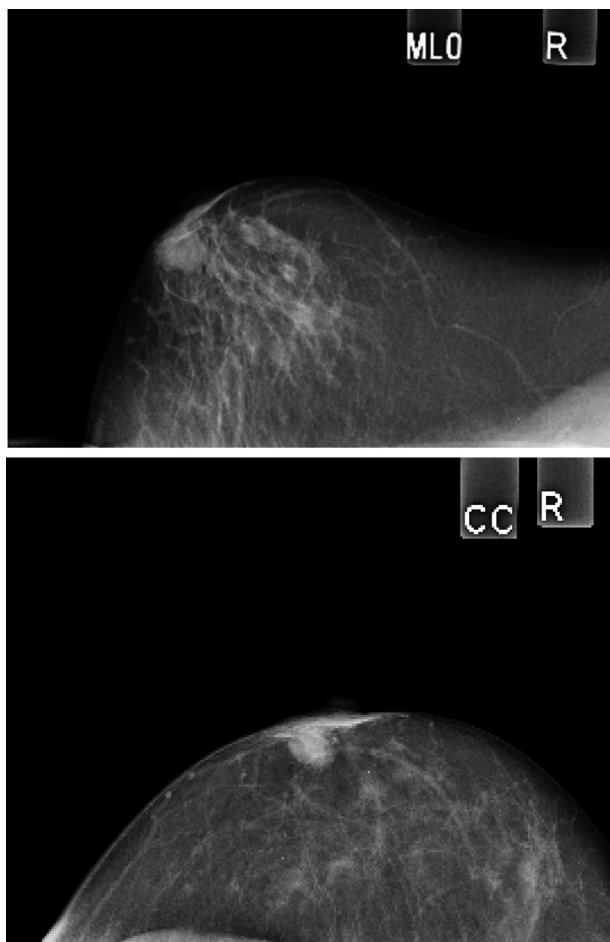


図1；MLO, CCともに右乳房乳頭直下に境界明瞭な高濃度腫瘍を認めた。カテゴリー3

や不均一な15×14×16mmの縦横比の高い腫瘍を認めた。

胸腹部造影CT（図3）；右乳頭直下に造影された比較的限局される腫瘍を認めた。明らかな腋窩、鎖骨上窩リンパ節腫大、他臓器転移は認めなかった。

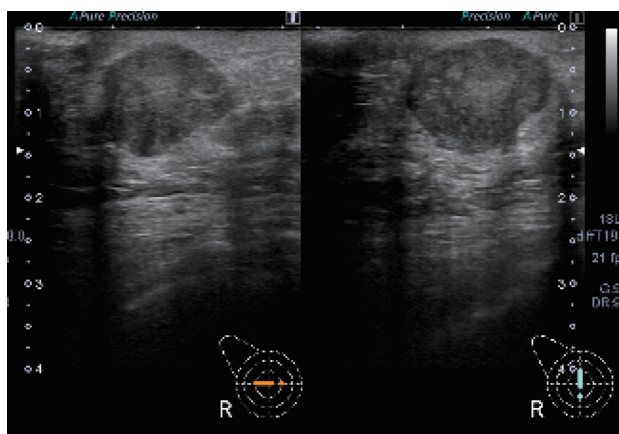
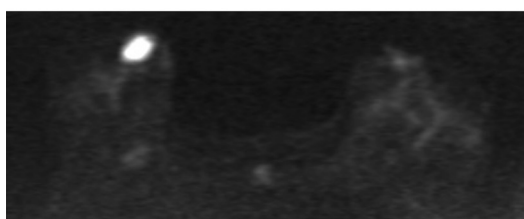


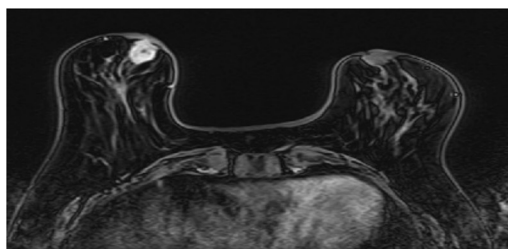
図2：辺縁明瞭で内部はやや不均一な15×14×16mmの縦横比の大きい低エコー腫瘍を認めた。



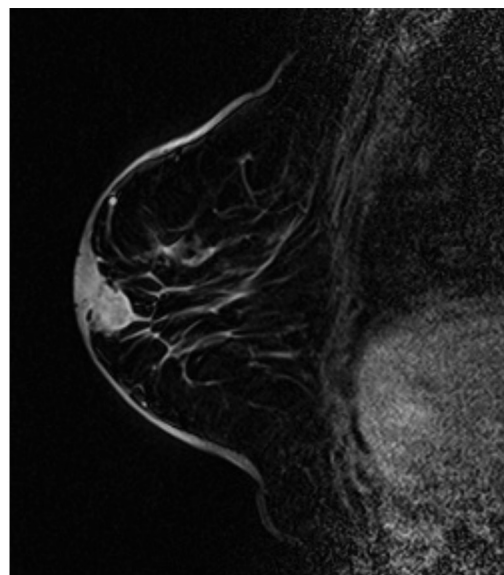
図3：右乳頭直下に造影される比較的限局された腫瘍を認めた(矢印)。明らかな腋窩、鎖骨上窩リンパ節腫大、他臓器転移は認めなかった。



a



b-1



b-2

図4：拡散強調横断像で腫瘍は高信号を示し明瞭に描出された (a)。右乳房に早期造影効果のある腫瘍が認められた (b-1, 2)。

乳房造影 MRI 検査 (図4)；拡散強調横断像で腫瘍は高信号を示し明瞭に描出された (a)。右乳房に早期造影効果のある腫瘍が認められた (b-1, 2)。

右乳腺腫瘍の針生検では invasive ductal carcinoma と診断された。

以上より T1N0M0 Stage I の右乳癌の診断にて右乳房

切除術 センチネルリンパ節生検を施行した。センチネルリンパ節は迅速病理検査にて転移を認めなかった。

切除標本では (図5) 右乳頭4時方向に境界明瞭な白色充実性腫瘍を認めた。

病理所見 (図6) は HE 染色の弱拡大で腫瘍は境界明瞭で内部に fibrotic focus を伴っていた (a)。強拡大では

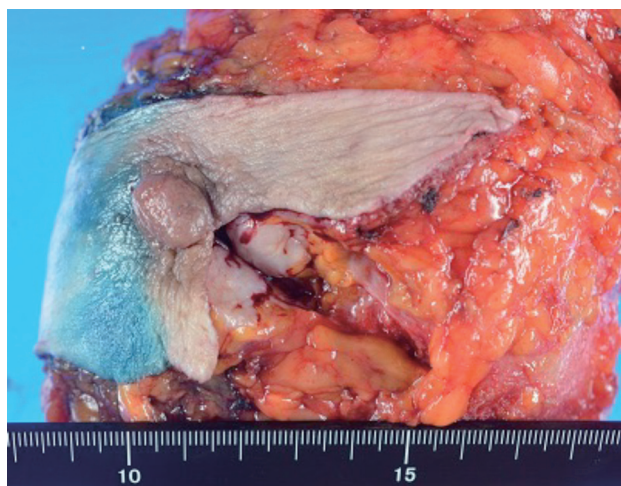


図5：摘出標本にて乳頭4時方向に境界明瞭な充実性腫瘤を認めた。

腫瘍細胞が微小嚢胞状あるいは管状構造をとって増殖しており，内部に好酸性分泌物が見られた（b）。免疫染色ではER，PgR，HER2はともに陰性（図7 a，b，c）で，Adipophilinは弱陽性（図8 a），EMAは部分的に陽性（図8 b）で，S100は陽性であった（図8 c）。以上より乳腺分泌癌と診断された。浸潤径は15×12mm，f，nuclear grade I，comedo necrosis（-），EIC（+），ly（-），V（-），ER（0%），PgR（0%），HER2（score 0），Ki-67 13%であった。

術後TC療法を4クール施行した。術後約6年の現在，再発転移の兆候をみとめていない。

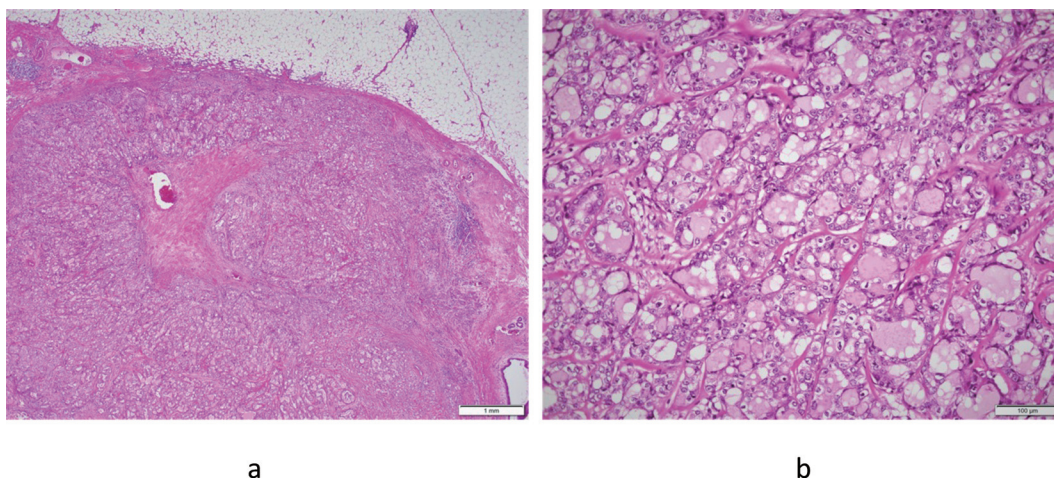


図6：HE弱拡大，腫瘍は境界明瞭で内部にfibrotic focusを伴う（a）。HE強拡大，腫瘍細胞が微小嚢胞状あるいは管状構造をとって増殖しており，内部に好酸性分泌物が見られる（b）。

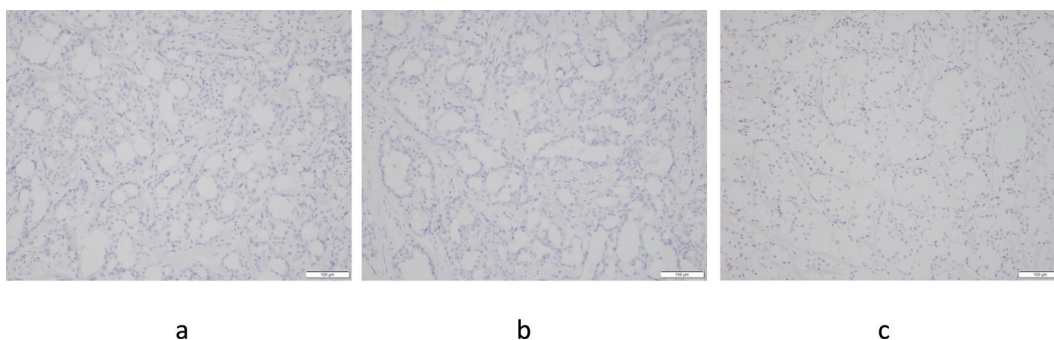


図7：免疫染色検査では，ER陰性（a），PgR陰性（b），HER2陰性（c）であった。



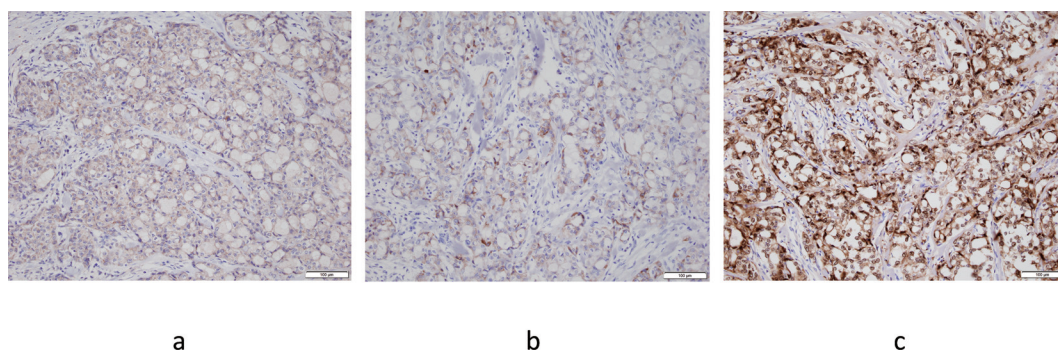


図8；免疫染色検査にて，Adipophilin は弱陽性（a），EMA は部分的に陽性（b），S100は陽性（c）であった。

## 考 察

乳腺分泌癌は1966年に McDevitt ら<sup>1)</sup>が，乳腺の腫瘍細胞が著名な分泌像を呈する特徴的な組織所見を有し，3～15歳までの若年者に発症した7例の乳癌を若年性乳癌として最初に報告した。日本では1984年の乳癌取り扱い規約第7版<sup>2)</sup>で妊娠および授乳期の乳腺にみられるものと類似した著明な分泌活動を示す細胞からなる癌腫でPAS陽性物質が細胞内と腺房様腔内に存在するものと定義されており，浸潤癌の特殊型に分類されている。発生頻度は0.03～0.15%と報告されている<sup>3)</sup>。

日本乳癌学会乳癌登録集計（確定版）によると，2016年での全乳癌手術症例91541例中23例（0.025%）であり，近年の統計でも非常にまれな腫瘍であることが示されている。

年齢分布は本邦での文献では13～85歳と広範囲にわたる報告例<sup>4)</sup>がある。そのうち30歳以下の占める割合が24%であった。全乳癌症例における30歳未満の占める割合が，1%前後であることよりやはり若年者好発傾向がうかがえる。画像所見では，一般的には特徴的な所見とするものはなく，本症例においても，MMGや超音波検査での診断は極めて困難と思われた。さらにCT/MRIも合わせても分泌癌の根拠となる特徴的な所見は見いだせなかった。分泌癌のサブタイプ分類ではER(-)，PgR(-)，HER2(-)のいわゆるtriple negativeの症例が多く，また核異型度が低く，細胞増殖の指標（Ki-67）も低いことが特徴とされるが<sup>5)</sup>，本症例もほぼ同様であった。予後については『小児例，腫瘍径2cm未満，腫瘍

辺縁における間質浸潤の像がないこと』がそろえば比較的前後が良いとされるが，より高齢の症例においては必ずしもそうではないとの報告<sup>6)</sup>もみられる。また分泌癌の腋窩リンパ節転移の頻度は，ほかの浸潤性乳管癌と同率との報告や<sup>4,7,8)</sup>，リンパ節転移例には通常の浸潤性乳管癌と同様の補助化学療法が必要とする報告もあり<sup>9)</sup>，まだまだ確立した標準療法は定まっていないのが現状である。

本症例は67歳女性で腋窩リンパ節転移はなかったが，triple negative 乳癌の術後補助化学療法としてTC療法を4クール行い，今のところ再発の兆候は認めていない。高齢者の分泌癌の報告例も徐々に増えており<sup>8)</sup>，さらなる症例の蓄積による治療予後の検討が今後も望まれると思われた。

## 結 語

われわれは67歳の比較的高齢の乳腺分泌癌の一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。

## 文 献

- 1) McDevitt, R. W., Stewart, F. W.: Breast carcinoma in children. JAMA., 195: 388-390, 1966
- 2) 乳癌研究会編：臨床・乳癌取り扱い規約，第7版，金原出版，東京，1984
- 3) 難波清：分泌癌（若年性癌）．坂元吾偉（編）：取り扱い規約に沿った腫瘍鑑別診断アトラス 乳腺．文光

堂, 東京, 1992, pp. 71-74

- 4) 若月幸平, 金泉年郁, 八倉一晃, 江本宏史: 高齢者の乳腺分泌癌の1例. 日臨外会誌, **64**: 3009-3013, 2003
- 5) Diallo, R., Schaefer, K. L., Bankfalvi, A., Decker, T., *et al.*: Secretory carcinoma of the breast: a distinct variant of invasive ductal carcinoma assessed by comparative genomic hybridization and immunohistochemistry. Hum Pathol., **34**: 1299-1305, 2003
- 6) Tavassoli, F. A., Norris, H. J.: Secretory carcinoma of the breast. Cancer., **45**: 2404-2413, 1980
- 7) 山下晃徳, 内田賢, 井上祐子, 富田春郎 他: 乳腺分泌癌の1例. 乳癌の臨床, **12**: 536-540, 1997
- 8) 里美露乃, 鈴木やすよ, 前田豪樹, 島宏彰 他: 高齢者の乳腺分泌癌の1例. 臨床と研究, **91**: 806-810, 2014
- 9) 梶浦由香, 山崎弘資, 北田正博, 平澤雅敏 他: 乳腺分泌癌の1例. 北外誌, **48**: 28-30, 2003

## *A case report of secretory carcinoma of the breast in elderly*

*Natsu Okitsu, Yukari Harino, Takashi Tanaka, Hitoshi Miki, and Tadaoki Morimoto*

*Devision of Thyroid and Breast Disease, Taoka Hospital, Tokushima, Japan*

### SUMMARY

A 67-year-old woman was seen at the hospital because of a tumor in the area of the right breast. On physical examination, the tumor was elastic hard and movable. A core needlebiopsy revealed malignant findings' invasive ductal carcinoma. Mastectomy for right breast was performed. Pathological diagnosis was secretory carcinoma. The immunoprofile data were negative for ER, PR, and HER2, and were positive for the S-100, EMA, Adipophilin.

She has been free from recurrence and metastasis so far.

Secretory breast carcinomas are rare tumors, low-grade triple-negative carcinomas. Distant metastases from secretory breast carinomas and local recurrence are extremely rare. Standard treatment has not been deciderd yet.

We report a case of secretory carcinoma of the breast together with some bibliographical comments.

Key words : Breast cancer, Secretory carcinoma